

2-1	
主題	ユニット型施設における環境改善が与える、入居者の変化と効果
副題	暮らしの場における環境（設え）の大切さ

キーワード1 住まい	キーワード2 ユニット型施設	研究期間	6ヶ月
------------	----------------	------	-----

法人名	社会福祉法人 桐仁会		
事業所名	特別養護老人ホーム かしわ園		
発表者：高橋 千陽	アドバイザー：榎本 耕		
共同研究者：大澤 毅・竹本慶一郎・佐澤 光・菅原沙織			

電話	042-485-2002	FAX	042-485-2005
----	--------------	-----	--------------

今回発表の事業所やサービスの紹介	京王線国領駅より徒歩7分。周りにはマンション、ショッピングセンター、学校と住宅街の中に施設がございます。特養以外の事業として短期入所介護、居宅介護事業所、配食を行っており地域にとって必要な存在であり続けられるようユニットケアをはじめ多くの実践を重ねてきております。
------------------	--

**《1. 研究前の状況と課題》**

老人福祉法基本方針第33条で示されているようにユニット型特別養護老人ホームとは「暮らしを継続できる場」でなくてははいけません。しかし、開設から3年ケアの体制は徐々に確立されているものの暮らしが継続できる環境整備がされていたかという役割が果たせていない現状があり、以下の事例が存在していた。

事例：Aさん（介護度2 69歳 女性）  
入浴以外は居室から出て来ず引きこもりの状態であった。

事例：Bさん（介護度5 90歳 女性）  
1日中休むことなく険しい表情で施設内を徘徊していた。夕方になると更に興奮は強くなり他ユニット入居者とのトラブルや食事が摂れないことで体重減少が見られた。  
（入居時43kg→31kg）  
このような状況に対し、環境と言う面に対し目を向けてこなかったことが課題となった。

**《2. 研究の目的ならびに仮説》**

入居者が暮らしの場であることを実感してもらい暮らしを継続してもらおう。また、その入居者を支える職員も、正しい知識の下に暮らしの場を作り上げ認知症の方や重度の方に対しての正しいアプローチ、サポートを行えるようにしていくことを取り組みとし、環境に対しての勉強会や施設見学等を行い、環境に対する施設の方向性を再確認することから取り組みを始めた。

事例：Aさん  
居室は、その方にとって一番居心地の良い場所となるが居室から出て息を抜ける場、趣味等を継続できる場を整備し幅のある生活。

事例：Bさん  
徘徊がなくなることは難しいが、少しでも心や体を休ませることができる環境を作る。また、環境を活用してくれることで夕食も摂ってくれるようになり今までの体重に戻り元気な状態を維持してもらいたい。

### 《3. 具体的な取り組みの内容》

- ①暮らしの場であることへの理解（勉強会）  
建物の理論・物の役割・施設見学
- ②正しい知識の下に自ユニットを振りかえる  
現状分析、家族、他職種からの意見。
- ③課題の提議  
各スペースの目標値を設定  
【玄関】自分の家と認識できる玄関作り。  
【廊下】「ちょっとひと休み」ができる休憩スペースの確保とその設え。  
【セミプライベートスペース】周りの人の動きが目に入らず、ボーっとすることができ、趣味に没頭できる場所と設え。  
【リビング】誰もが落ち着け食事が摂れる設え。人の動きがあまり目に入らない設え。  
【ベランダ】季節を感じ、カーテンを常に開けていたくなるようなベランダ（庭）の設え。

#### ④費用面

改善に必要な材料を調査。予算5万円を踏まえた変更案を企画書として提出。また、変更による効果予測も添付し上司の理解を得る

#### ⑤実行

ホームセンター、リサイクルショップをメインに購入開始。取り組んだユニット職員5名  
取組期間①～⑤約半年間

#### ⑥取り組みの中でのポイント

決して、職員目線にならず入居者の暮らしを第一考えた変更を行っていく。また、家族、他職種などと違う目線で関わる方の意見も重要視していく。その中で、常に考えていたことは「A・Bさんだけでなく入居者がメインとなり自由に使いこなせる環境」を大切に取り組んだ。

### 《4. 取り組みの結果》

事例：Aさん

徐々に変更となったスペースを見てもらう機会を増やし、自分の居場所を見つけてくれるサポートを実施。結果、朝刊を持ちセミプラに出てくるようになった。また、外を眺めうたた寝する場面も目にするようになった。

事例：Bさん

玄関変更後、2週目で職員の誘導なく「ただいま」と戻ってこられるようになり自ら食席に着くようになった。体重も完全ではないが6月1日時点で37, 8kgまで戻ってきた。また、徘徊時間も以前に比べ激減。昼寝までできるようになってきた。

その他効果

- ・風邪を引く入居者の減少
- ・家族の面会滞在時間が平均1時間伸びた
- ・リビング内での転倒事故件数が減少
- ・他ユニットへ良きモデルとなり全体に波及
- ・ユニットに対する愛着とチームワーク強化

### 《5. 考察、まとめ》

建物を活かし、ハードを使いこなす事で暮らしの場への環境作りは、入居者のQOL向上や職員の意識を高めることができた。今後も入居者の変化に合わせ、どの方が入居されても暮らしが継続できる環境が必要である。

### 《6. 倫理的配慮に関する事項》

尚、本研究発表にあたり、ご入居者ご家族の方々に対し口頭にて確認し、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることは無いことを説明し、回答をもって同意を得たこととした

### 《7. 参考文献》

- 1)「個室ユニットケア型施設計画ガイドライン」(2005)日本医療福祉建築協会
- 2)「バリテーション」(2001)ナオミ フェルト 筒井書房
- 3)「ユニットリーダー研修ハンドブック」(2015)日本ユニットケア推進センター

### 《8. 提案と発信》

特養は、高齢者にとって最期の暮らしの場となる方が多い中、環境はとても重要であると考え。特に認知症の方は、環境の変化に弱いことが立証されている中、いかにその人が住みこなそうとする意欲を持てる空間へと変えて行けるかが重要であり介護職員としての専門性も問われていくものであると考える。